

東京大学史史料室ニュース

第40号 2008・3・31

目次

あなたの大学にアーカイヴズはありますか?..... 2
『内田祥三史料目録』の刊行によせて..... 4
受贈図書一覧..... 6
史料室日誌抄録..... 8

濱尾新像をめぐる秘話

濱尾新像をめぐる秘話

「あの学内随一の大銅像、土木総長と謳はれた濱尾新元総長の銅像も去る [1944年4月] 四日征きました
...一昨年以来次々に出陣していった学内の諸銅像につづいてまさに横綱の場所入りともいふべきもの」

『帝国大学新聞』第980号



秘話 2 : 60 年代後半の出来事

秘話 2 : 60 年代後半の出来事

アーカイヴズのない大学に所属して

筆者が所属している近畿大学には、2000年より創立者世耕弘一関係の史料を保存して伝記などを編集する建学史料室が設置されており、建学理念を広く知らせる上で成果を挙げつつある（2007年には長編大河漫画『山は動かず 世耕弘一伝』の企画編集も行っている）。

しかし、現在この大学では「21世紀教育改革」の一環として、自校史教育の全学的実施が検討されている。自校史教育を本格的に進めるためには、その自校史教育が、建学理念を伝えるだけでなく、単なる自校史に留まらない大学史全体の大きな流れを描こうとする視点や、その大学の歴史に関する資料が適切に保存され、学生や市民に広く開かれていることも求められるのではないだろうか。こうした動きは、まだこの大学には見られない。

周知のように国立大学を中心とした一部の大学で、非現用の法人文書（公文書）を歴史的な文書として継続的に整理・保存するアーカイヴズ（文書館）が設置され、その取り組みが注目されている。一方、大多数の私立大学ではアーカイヴズは作られていない。個人情報保護のかけ声のもと、非現用となった文書は、従来以上のペースで廃棄されている可能性もあるが、大学アーカイヴズを設けない大学では、その歴史をたどる資料はどうなってしまうのだろうか。近年、駒沢大学や大東文化大学などにおけるアーカイヴズセクションの新設（駒沢大学禅文化博物館大学史資料室、大東文化歴史資料館（大東アーカイヴズ）が伝えられているが、まだまだ数少ない動きである。大学史編纂に関わった経験を持ち、高等教育史を研究フィールドとしている身としては、なんとかしてこの大学でもアーカイヴズ設置の必要性を訴えていかなければならないだろう……。

評価・選別の共同研究に参加して

そんなことを考えていたところ、縁あって2005年度より2007年度にかけて科学研究費補助金研究会「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別に関する基礎的研究」（研究代表者：京都大学西山伸）に参加することができた。この共同研究は、評価・選別に関する理論的検討や実践例の検

討などを通して、「大学アーカイヴズにおける評価・選別とは何か」を追求したものである。

大学アーカイヴズにおいては、偶然残された少数の歴史資料を保存するだけでなく、学内の公文書のうち非現用となったものを体系的に把握し、それを評価・選別しながら新たに保存の道筋をつけていく作業が、その中心的な作業である。今後、各大学でアーカイヴズ設置の必要性が議論される際には、「大学アーカイヴズが行う歴史的公文書の評価・選別とはどのようなことか」という点が議論のポイントになるだろうと考えられる。

今回の共同研究を通して、評価選別に関する理論的動向や、自治体のアーカイヴズで蓄積されつつある評価・選別の取り組み、そして北海道大学、小樽商科大学、東北大学、東京大学、立教大学、大東文化大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、広島大学、九州大学など様々な大学の試みなどについて具体的に知ることができた。詳細は研究報告書に譲るが、筆者がこの共同研究に参加して特に注目した点について紹介させていただきたい。

評価選別の必要性

大学アーカイヴズが設置されても非現用になった公文書を歴史的な文書として保存する作業を開始した当初は、偶然残った文書や、少数だけ移管された文書を扱うことが多いので、評価選別は切実な問題ではないのかもしれない。しかし、この業務が軌道に乗り始めると、すぐに物理的限界に直面するので、何らかの評価基準のもとに、何を整理保存するのか、何を廃棄するのかを決めなくてはならなくなるだろう。また、評価選別の基準や準備体制が整っていないと、学内の多くの文書がスムーズに移管されることは難しいだろう。こうした意味で、アーカイヴズをこれから設けようとする大学であっても、評価選別について研究する必要性は決して小さくないと感じた。

評価・選別を誰が実行するのか

非現用になった文書の評価・選別が必要だとし、次に誰が行うのか、という問題が浮上する。今回の共同研究を通じてアーカイヴズの様々な評価・選別論に接することができた。中

には、「文書の価値を最もよく知っているのは、その文書を生み出した部署の実務担当者なのだから、評価・選別は、各部署に任せればよい」という考え方もある（イギリスにおけるジェンキンソンのアーカイヴズ論など）。しかし、そうした考え方では、文書の歴史的価値を判断基準に入れるのは難しくなるだろう。各部署の担当者は自らの業務に関しては詳しくても、大学全体でどのような文書が生み出されるのかを体系的に把握することは実際問題として難しい傾向があることも研究会を通じて知ることができた。

やはりアーカイヴズには、大学内の文書を体系的に把握し、歴史的価値についても判断できるような専門性を持った人材（アーキビスト）が配置される必要があるだろう。アーキビストの養成をどうするのか、というのは大きな課題となっているようであるが、アーキビストとしての専門性を持った人材の必要性がもっと意識されるようになれば、人材養成も次第に軌道に乗るだろうと考えられる。

評価・選別に関する先行的取り組み

研究会では、大学アーカイヴズだけでなく自治体のアーカイヴズの取り組みを見学する機会にも恵まれ、より良い評価・選別を目指して様々な試みがなされつつあることを知った。

ある自治体アーカイヴズへの見学では、評価選別作業を模擬的に体験する機会にも恵まれ、評価選別の難しさを実感した。各アーカイヴズでは評価選別基準を定めており、それに基づいて評価選別作業を行っているが、評価基準があっても個々の文書について保存か廃棄か、という判断を単純に下せないケースが多いようだ。

評価選別を慎重に行うために、その文書が現用段階ではどのような使われ方をしていたか、学内の文書全体ではどのような位置にあるのか、さらに、今後どのようなニーズが予想されるのか、どのような歴史的価値があるのか、といった点について複数のメンバーで何ヶ月もの時間をかけて検討しているアーカイヴズがあることを知った。

さらに、評価選別の妥当性を高めるために、各文書を評価選別した判断理由などを記した記録をきちんと残して、その評価記録自体を将来の公開に備えようとしているアーカイヴズもあった。

こうした自治体アーカイヴズでの試みを積極的

に取り入れて、より妥当性のある、より透明度の高い評価選別を実施しようとする大学アーカイヴズがあることもわかった。

様々な大学アーカイヴズ像

このように、大学アーカイヴズを作るならば、専門性の高いアーキビストを配置して、妥当性のある評価選別が行われる方法を模索する必要があることを知ったが、同時に、各大学の状況に応じて様々なアーカイヴズが存在し得ることも知った。

アーカイヴズにどれだけの予算をかけ、スペースを割り、何人のアーカイヴズをどのような立場で配置するのか、という条件は様々である。例えば、ある大学では学内で非現用となった文書をアーカイヴズがいったんすべて受け入れ、複数のアーキビストが1万冊以上の文書を評価選別の対象にできる体制をとっている。別のある大学では、各部署から「非現用となった文書の廃棄を予定している」という連絡がアーカイヴズに入るとアーキビストがその部署に出向き、その場で評価選別を行っている。あるいは、公文書のアーカイヴズへの本格的な移管はまだ始まっていない大学もある。共同研究を通じて、各大学アーカイヴズの事例を知ることによって、限られた条件のなかで様々な形態の評価選別を選択すればよいことを実感した。

また、非現用となった文書の評価選別や保存・公開を基幹的な業務としながらも、歴史的文書を用いた研究、展示・講演会などの企画、自校史・大学史教育の実施などの取り組みを、各大学アーカイヴズはそれぞれ独自の視点から展開していること、そして取り組みに費やすエネルギーの配分についてもそれぞれ悩みながら工夫していることがわかった。

このように大学アーカイヴズでは、評価選別を始めとして、やるべきことや、取り組み可能なことが色々あると同時に「これだけの立派な条件を整えなければ大学アーカイヴズを作ってはならない」という訳でもないということ気づくことができた。

今回の共同研究を一つのきっかけとして、少しでも多くの大学でアーカイヴズ設置の機運が高まることを期待したい。

（とみおか まさる：近畿大学教職教育部）

この度、東京大学史史料室のプロジェクト「東京大学戦前期の総長関係資料の基礎的調査及び研究」における成果の一部として、『内田祥三史料目録』が刊行される運びとなった。これは、昨年(2007年)刊行された『古在由直史料目録』に続くものである。

本目録は、東京大学史史料室に所蔵されている「内田祥三史料」(以下「内田史料」)についてまとめたものであるが、当史料の手引きとしては、『東京大学百年史』(1984～87年)刊行の際に東京大学百年史編集室の手によって作成された小冊子「東京大学史史料目録4 内田祥三史料目録」(1978年)がすでにあり、その意味においては、今回の作業は従来の目録の焼き直しといった感も否めない。しかし、前回の目録小冊子の流通がごく限られた範囲であったこと、その発行からすでに30年が経過したことを考えると、今、改めて『内田祥三史料目録』を発行することには、「内田史料」の存在をより広く周知するという点において十分な意義があると思われる。小稿では、今後「内田史料」がより多くの人に活用されることを願いつつ、周縁も含めた簡単な史料紹介を行いたい。

東京帝国大学第14代総長を務めた内田祥三の個人所蔵資料が本学へ寄託されたのは、『東京大学百年史』編纂の過程であった。1972年12月14日に内田が亡くなった後、御遺族の御厚意によって史料が提供されることとなり、1976年5月から12月にかけて、東京大学大講堂内の東京大学百年史編集室(現在の大学史史料室)に運び込みの作業が行われた。膨大な史料群を半年以上かけて運んだわけだが、それでも当史料室に運び込まれ保管されている史料が内田祥三所蔵史料の全体ではない。内田家に遺されていた史料は、1983年以降東京都公文書館にも移されており、それらは『内田祥三資料目録』(Ⅰ)(Ⅱ)として目録化され、来館した利用者が閲覧できるように整理されている。いったん百年史編集室に運び込まれた史料の中にも、あえて目録には記載せず、東京都公文書館に移されるため内田家へ返却されたものが多数あるようだ。百年史編集室では、内田祥三所蔵史料のうち大学関係資料に重点を置いて整理、目録化したのである。

大学関係資料に限ったとはいえ、その量は段

ボール20箱にも及び、史料室の一隅を今も堂々と占めている。また、「内田史料」の中には、内田自身によって内容ごとにきちんと整理され綴じられたファイルが多く含まれており、几帳面な内田の性格の一端をうかがわせる。内田の逝去が今から36年前であることを考えると、氏の警咳に接したことのある人もまだ多くいるだろうが、百年史編集室に「内田史料」が運び込まれたころようやくこの世に生を受けた筆者にとっては、十分歴史上の人物である。内田の人間性などの面については、間接的に窺い知る他はない。

『内田祥三先生作品集』(1969年)や「座談会内田先生を偲んで」(日本火災学会編『火災』1973年)はそうした点を窺い知ることのできる材料の一つで、複数の関係者の回想を通して内田の人物像が見えてくる。また、『東京大学史紀要』に連載されている「内田祥三談話速記録」は、晩年の内田へのインタビューをそのまま活字化したもので、内田本人の語り口に接することのできる貴重な記録である。

これらが、内田という人物の主に社会的な一面を理解するのに役立つ資料である一方、一風変わったものとしては、内田祥三の長女松下美柯氏が著した『それは昭和五年の春だった』(2006年)がある。著者の子供時代の思い出が主題だが、娘の眼を通して描かれる父親としての内田の姿がよくとらえられており、楽しく読むことができる。謹厳な性格で、「恐い先生」として知られていた一面とは対照的に、晩酌をしながら「お父さんは深川一の美男子でさ」と幼い娘に語りかける内田の姿は、想像するにとても微笑ましい。

美柯氏の回想によれば、内田は「新聞は五種類、雑誌は十指に余る数」を購読していたという。「どっさり」というのが内田の口癖で、新聞や雑誌をこのように「どっさり」取るのが好きだったらしい。

毎朝出勤前に、新聞に一応目を通し、十種余の雑誌は、書斎の特大な机の上に端からならべ、年末になると一年分まとめて、それぞれに製本した。その他送られて来る本も沢山あって、本は増えるばかり。本棚はどの部屋にも可能な限り作られてはいたが、それでも足りず、最後は二階の廊下の端から端迄、長い板を渡し、押し

寄せる本の波をしのいだ (35 頁)

このようにして内田家で保存されてきた大量の資料の一部が、現在「内田史料」となって大学史料室で眠っている。

さて、肝心の史料の内容に移りたい。内田の専門は建築学で、1916年東京帝国大学助教授に就任した後、21年に教授、23年営繕課長事務取扱、24年図書館建築委員、建築部長、29年工学部建築学科教室主任、41年工学部長と歴任し、43年にはついに総長の座についた。また、これらの職務のかたわら、学内外で多くの役職を兼任し、終戦後に総長の座を退いてからも自らの学識を活かした精力的な活動を展開した。「内田史料」には、内田自身の専門である建築分野の資料のみならず、これら学内外での各役職に関連した資料が数多く遺されている。

内田の事績は多岐に渡るが、そのなかでも一際異彩を放つ業績が二つある。一つは、関東大震災後の本郷キャンパスの復旧に中心的な役割を果たしたこと、そしてもう一つは、1943年から終戦までの時局最も困難な時期に、東京帝国大学第14代総長としての重責を果たしたことである。これらの事績に関連する史料は非常に多く、まさに「内田史料」の花形と呼べる位置にある。

内田が営繕課長事務取扱を嘱託されたのは1923年7月9日、関東大震災発生のおよそ2ヵ月前のことであった。営繕課長となる以前から、現在の工学部2号館や大講堂などの設計に関与してきた内田は、そのまま震災後のキャンパス復興にも指導的役割を果たす。「一人の建築家が広大なキャンパスのほとんどすべての建物を完成させた、極めて稀有な例」といわれるほど、内田の貢献は多大であった(『東京大学百年史』通史(二)、408頁)。「内田史料」には、震災の被害状況を報告する史料から新たに建設する建物の概要、実際の図面まで、キャンパス復興に関する史料が豊富に揃っている。また、本郷キャンパスの復興だけでなく、この時期の懸案となっていた駒場農学部と第一高等学校との移転問題に関しても、多くの史料が遺されている。

一方、総長時代の内田は、全学的な問題のほとんどにかかわらざるを得ない立場にあったため、収められている史料も範囲が広い。この時期の史料のなかで、研究上これまでに最も活用された例としては、当史料室の編集による『東京大学の学徒動員・学徒出陣』(東京大学出版会、1998年)が挙げられよう。本書では、「第三部 資料 II 学徒動員・学徒出陣関係史料」として、「内田史料」より関係部分が翻刻されているほか、この史料を分析した高橋陽一・中野実論文「第一部 東京大学の学徒動員・学徒出陣 III 学徒出陣者の統計と分析」が収録されている。本論文では、「内田史料」に含まれる「厳秘 東京帝国大学概況書」(1943、44年のもの)や「昭和十八年十二月三十一日現在本学学生生徒在籍者数調」といった史料に依拠しながら、東京帝国大学における学徒出陣者の傾向を抽出している。史料の制約を受けながらも、学部・大学院別に時期毎の入営・入団者の割合がグラフで示されており、興味深い。

学徒出陣の問題に限らず、総長時代の史料は活用の幅が広そうである。ファイルで綴じられた史料が多いため、目録だけで全容を理解することは難しい。是非実物をご覧になって頂きたい。

内田自身も、自分の総長時代を振り返った文章を書いている(「東京大学が接収を免れた経緯について」『学士会会報』660・661、1955年)。戦中は軍から大学施設使用の要請を受け、戦後は占領軍から接収される危機にさらされた東京大学において、総長であった内田はどのように対応したのか。短い文章ではあるが、当事者による生々しい記録である。史料と合わせて一読されたい。

ここに紹介した以外にも、「内田史料」には貴重な史料、興味深い史料が多く収められている。何より内田の専門分野柄、図面や写真の史料が多く含まれているため、文字史料のみでは味わえない空間的な臨場感が得られ、視覚的にも楽しい。今回の史料目録の刊行が、内田に関する研究上の関心を多少なりとも高める役割を果たしたとすれば、筆者にとっても望外の喜びである。

(だいま としゆき：大学史料室)

受贈図書一覧（抄）（平成19年10月～平成20年1月）

江戸東京博物館 NEWS vol.59,60 東京都江戸東京博物館	平成19年9月,12月	日本大学史紀要 第10号 日本大学総務部大学史編纂課	平成19年10月
記念館だより 第43号 谷本宗生	平成19年10月	立教学院史研究 第5号 立教学院史資料センター	平成19年10月
霞城館だより No.45 霞城館	平成20年1月	慶應義塾福澤研究センター資料 11 慶應義塾福澤研究センター	平成19年8月
開港のひろば 第99号 横浜開港資料館	平成20年1月	アーカイブズ・ニューズレター No.7 国文学研究資料館	平成19年9月
物性研だより 第47巻50周年記念号 東京大学物性研究所	平成19年10月	東京大学法学部研究・教育年報 19 東京大学法学部	平成19年10月
Ouroboros 第32号 東京大学総合研究博物館	平成19年10月	徳川記念財団会報 第10号 徳川記念財団	平成19年12月
関東学院学院史資料室ニューズ・レター 第11号 関東学院学院史資料室	平成19年10月	東北大学百年史 一 通史一 東北大学	平成19年10月
東北大学史料館だより 第7号 東北大学学術資源研究公開センター史料館	平成19年9月	慶應義塾福澤研究センター通信 第7号 慶應義塾福澤研究センター	平成19年9月
中央大学百年史編集ニュース 37（最終号） 中央大学入学センター事務部大学史編纂課	平成19年9月	一高同窓会会報 第394～396号 一高同窓会	平成19年10月～ 平成20年1月
京都大学大学文書館だより 第13号 京都大学大学文書館	平成19年10月	学都 No.22,23 谷本宗生	平成19年10月,12月
かわら版 第253～256号 谷本宗生	平成19年10月～12月	宮城学院資料室年報一信・望・愛一 第12号/第13号 宮城学院資料室	平成19年3月
日本教育史往来 No.170,171 谷本宗生	平成19年10月,12月	青淵 第七〇四～七〇七号 渋沢栄一記念財団	平成19年11月～ 平成20年2月
大学史研究通信 第52号 谷本宗生	平成19年10月	緑丘アーカイブズ 第6号 小樽商科大学百年史編纂室	平成19年10月
勸学院の雀 第148～150号 谷本宗生	平成19年9月～ 平成20年1月	大総センターニュースレター 第6号 谷本宗生	平成19年9月
教育史学会 会報 No.102 谷本宗生	平成19年11月	かわら版 7-3号 谷本宗生	平成20年1月
UP 420～423号 東京大学出版会	平成19年10月～ 平成20年1月	清冽の炎 第3巻 谷本宗生	平成19年7月
信綱の旅と歌-旅ごころは、歌ごころを生む-（図録） 佐佐木信綱記念館	平成19年10月	福島県歴史資料館収蔵資料目録 第38集 福島県歴史資料館	平成19年3月
東海大学学園史ニュース No.2 東海大学学園史資料センター	平成19年10月	教育史学会紀要 第50集 谷本宗生	平成19年10月
1880年代教育史研究会ニューズレター 第19号 谷本宗生	平成19年10月	第三回館史編纂室資料展 皇學館大学125年の歩み（図録） 皇學館 館史編纂室	平成19年11月

明六社 福田信宏（講談社学術文庫）	平成19年10月	駒場運動会記念エハカキ 谷本宗生	大正9年
瀬島龍三回想録 幾山河 谷本宗生	平成19年9月	コマバウンドウクワイキネンエハカキ 谷本宗生	大正8年11月
関西大学百二十年史 関西大学年史編纂室	平成19年3月	テーマ展 渋沢栄一と平和の親善大使「答礼人形」(ポスター・チラシ) 渋沢史料館	
東大全共闘1968-1969 谷本宗生	平成19年10月	企画展 第三高等学校の歴史-昭和期を中心に-(チラシ) 京都大学大学文書館	
文豪・夏目漱石-そのころとまなざし 谷本宗生	平成19年9月	立命館大学国際平和ミュージアムだより VOL15-1,2 立命館大学国際平和ミュージアム	平成19年10月, 平成20年1月
広島大学文書館 施設のご案内(リーフレット) 広島大学文書館	平成18年3月	東京大学先端科学技術研究センター二十年史 ある一部局の自省録 東京大学先端科学技術研究センター	平成19年10月
広島大学五十年史(附録CD-ROM) 通史編 広島大学	平成19年3月	教える×学ぶ-師範学校といしかわの教員養成史-(図録) 谷本宗生	平成19年10月
東京大学陸上運動部120年史 谷本宗生	平成19年8月	教える×学ぶ-師範学校といしかわの教員養成史-(ポスター) 金沢大学資料館	
HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山学園創立75周年記念誌 南山学園	平成19年11月	企画展示 ハマの謎とき-地図でさぐる横浜150年(ポスター・チラシ) 横浜開港資料館	
芝浦工業大学創立80周年 温故知新 1927-2007 谷本宗生	平成19年10月	特別展 信綱の旅と歌-旅ごころは、歌ごころを生む-(ポスター・チラシ) 佐佐木信綱記念館	平成19年度
国士館九十年 国士館	平成19年11月	校歌誕生-早稲田大学校歌制定100周年記念-(ポスター) 早稲田大学大学史資料センター	
愛知大学史研究 2007年度版(創刊号) 愛知大学東亜同文書院大学記念センター	平成19年10月	常設展 大隈重信(ポスター) 早稲田大学大学史資料センター	
愛知大学東亜同文書院ブックレット 別冊 愛知大学東亜同文書院大学記念センター	平成19年4月	出会いの美術(ポスター) 小杉放菴記念日光美術館	
近代国学の研究 谷本宗生	平成19年12月	公開講座 異星の踏査-「アポロ」から「はやぶさ」へ-(ポスター・チラシ) 東京大学総合研究博物館	
東京帝国大学傳染病研究所繪端書 後藤久(個人)		130年前の「同女」へGo!新島襄と同志社女学校(ポスター) 同志社女子大学史料室	
東京帝国大学大講堂新築記念(はがき) 後藤久(個人)	大正14年7月	東大生はどんな本を読んできたか-本郷・駒場の読書生活130年 谷本宗生	平成19年10月
駒場運動会(はがき) 谷本宗生		記録を守り記憶を伝える-アーカイブズ学への招待(ポスター) 学習院大学大学院人文科学研究科	
東京藝術大学創立一二〇周年記念音楽祭~藝大一二〇年をふり返って~ 東京藝術大学演奏藝術センター	平成20年1月	国際シンポジウム 近世アーカイブズの多国間比較(ポスター・チラシ) 国文学研究資料館	
学術研究会議の共同研究活動と科学動員の終局 -戦中から戦後へ-(抜刷) 青木洋(横浜国立大学経営学部)	平成19年10月	金沢大学3学域化と総合大学の教員養成の新機軸 -地域における教養成の過去・現在・未来-(ポスター) 金沢大学資料館	平成19年度

史料室日誌抄録（平成 19 年 10 月～平成 20 年 1 月）

10月28日（日）～10月30日（火）

谷本室員、教員養成シンポジウムパネリストとして参加（金沢大学）。

11月16日（金）～11月27日（火）

『東京大学史史料室ニュース』第39号刊行、発送。

11月21日（水） 谷本室員、教育史学会大会打ち合わせ（青山学院大学）。

11月30日（金） 史料室に新型マイクロリーダー納入。

12月27日（木） 『東大紛争期のスクラップブック・写真帳』デジタル化。

1月16日（水）～1月19日（土）

谷本・瀬川室員、プロジェクト調査出張（京都大学・大阪大学）。

1月28日（月） 谷本室員、教育学部清水ゼミ生見学対応。

この間の閲覧者数

学内者 3名

学外者 13名

主な学外閲覧者所属機関

東京音楽大学、茨城県庁、東日本国際大学、京都大学、グループ現代、専修大学

その他

文献撮影・複写許可件数 12件

調査（照会）件数 17件

60年代後半の出来事

1968（昭和43年）8月24日夜、学外のフーテン族ら100名ほどが大講堂（安田講堂）前に乱入した。花火や踊りで騒いだ後、濱尾総長像に白ペンキを浴びせ、銅像の首をノコギリで切断しようと試みるが、失敗した由！鬱屈した当時の若者心理を反映したエピソードであろう。この事件を機に、文部省は各大学構内にある歴史的建造物などの管理徹底を指示する。

写真：史料室蔵

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第40号

発行日：2008年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03（5841）2077（直）

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉市稲毛区六方町13-2